沓掛良彦 著　大修館書店
『詩林逍遙 ― 枯骨閑人東西詩話』

本誌前号で紹介のあった『讃酒詩話』（小林二男氏評）に続いて、またも東西の古典詩を縦横に論じた実に味わい深い書物である。これまで著者が各所で発表してきた文章に新たな書き下ろしを加え、飲酒詩のみならずさらに広範な詩作品をめぐって、まさに詩の世界を自由に逍遙する内容となっている。

前半は「古典詩の東西」、後半は「泰西古典詩歌逍遙」と題された本書を読んで改めて強く感じるのは、詩的なるものに対する著者の本性的な嗅覚の鋭敏さである。枯骨閑人先生の著書として「堅苦しい論文だの、細かな考証に及んだ長たらしい論考だのはここに収めることはしなかった」ためでもあろう、著者の詩的な感性の直覚的な働きが――もちろん、秀でた語学的才能によって多数の言語に通じ、直接に数多の詩人に接してこそできることであるが――いっそう際立っている。それは、哀悼、無常、別離などのテーマごとに和漢の詩歌と西洋古典の詩を自在に拾い上げて比べ合わせるその手際しかり、また、和泉式部とルイーズ・ラベと魚玄機という東西の女性詩人に、「閨怨の歌」の作者としての資質的な近似を認め、和泉式部のみに自己凝視の姿勢を見る炯眼しかり、また、メレアグロスの詩にわが国王朝時代の後朝の歌に通じるものを見てとる明察しかりである。そして何よりも、「閑人菲才にして詩人たるの才なく」とおっしゃるが、『ギリシア詞華集』の諸詩のもつ味と楽しさをいかなる説明よりもよく伝える訳詩を初めとして、本書の随所に引かれる詩句の翻訳が、原詩の香りを再現する、やはり見事な詩となっている。散文的な資質しか持ち合わせぬ評者としては、「猥褻」の章の最後に披露された唐詩のパロディーたる「姦詩」まで含めて、かなうなら学びたく思うところである。

このように著者ならではの仕方で東西の詩を我々の身近に引き寄せ、その風味を教えてくれる本書であるが、西洋古典学者としての面目も窺え、「サッフォー・断片三一」においては実に精緻な読解が示される。また、先の著書では飲酒詩としては秀作がないと批判された評者の専門とするラテン文学ではあったが、本書では、わが国の「本歌取りの文学」との類似を言いつつ、原語に触れなければわからないその「渋い持ち味」に関してなされる的を射た解説に、思わず頷いてしまう。

著者の鋭敏な心は、作品に向かうだけではなく、「推移の相に人一倍敏感で、「うつろうもの」「はかない存在」としての人間を思う詩人たち」自身にも深い共感を寄せ、ローマから追放されたオウィディウスについて、「確かに流謫の境遇は詩人にとっては悲劇だが、その悲哀が詩人を駆り立てて後世の読者の心をも打つ真摯な傑作を生ませ、詩人の身に思わぬ光栄をもたらすこともあるのだと思うと、詩人の運命とはなんだろうと改めて思わざるを得ない」と感慨を漏らす。この思いには、とりわけ昨今の大学における居心地の悪さについてときに枯骨閑人先生の漏らす嘆きと、何か相通じるところがあるように思うのは、評者の見当違いであろうか。ともあれ、著者が大学という場に留まり、古典学者と詩人の間に立つという貴重な役割を担ってくれたおかげで、我々はこのような滋味豊かな書物を手にすることができた。

（岩崎務）